

## §0-2.

### 本研究の目的

本研究は性別という枠組みに対し、肌の色という切り口からアプローチしたものである。その目的は、第一に顔の認知における肌の色の影響を明らかにすることである。顔の性別判断には形態が最も強く作用していると考えられる (Brown & Perrett, 1993; Yamaguchi, Hirukawa, & Kanazawa, 1995)。だが、形態情報のみによって判断が可能であるということが肌の色という色彩情報の作用を否定する理由にはならない。我々の性別判断は肌の色によって左右されている部分があるのではなかろうか。また、「色の白いは七難隠す」という古くからの表現からも読み取れるように、特に女性に対して白い肌が望まれるという社会状況は否定すべくもない。昨今の「美白」という言葉の浸透、「美白化粧品」の市場拡大は、先の言い回しが現代にも根強く息づいている証拠ともいえよう。このような背景の前に、顔の性別判断、性別認知は肌の色によってどのように変動していくのであろうか。色白ならば女性として、色黒ならば男性として認識されやすいという現象が生じるのではなかろうか。本研究ではこれらの点について科学的な視点から確認を進めていく。

第二の目的は、顔の性別認知のメカニズムを肌の色という観点から整理することである。顔は情報の宝庫であり、我々はそうした情報を読むことに関しては確実に「得手」である。顔を前にしたとき、性別の判断がゴールとなるわけではない。意識せずとも脳内ではより多くの情報を得ようと処理が進められているのである。本研究においては、性別が判断され、その印象が確定するまでのプロセスを概観し、何がどのように性別認知のメカニズムに関わってくるのかを整理する。

更に目的の第三点目として、認知傾向からジェンダー、社会的通念を捉え直すことが挙げられる。先に指摘したように、肌の色に関しては女性に対してより強い縛りが働いているように捉えられる。ここで扱うのは服装や髪型、文化的表現といった随意的なレベルではなく、認知という、より初期の段階である。意識の働きにくいレベルにおいて得られた傾向はより潜在的な向性を探る手がかりとなるであろう。また、より根源的な傾向をここから探ることも必要となってくると思われる。実験によって得られた傾向を文化的な面から考察し、ジェンダーの在り方に対するより深い解釈を目指す。